

『一燈照隅』く世のため 人のため「私」という奇跡を生きるく

あやめ園の緑が早春の陽光に瑞々しく輝いています。七十一回生の皆さん、いよいよ巣立ちの時です。早朝から勉学に励む姿、部活動に打ち込む姿、また行事で躍動する姿など、出会って一年足らずですが、共に過ごした日々の一コマ一コマが脳裏に浮かんできます。また、卒業後の進路に向けた面接練習では、多くの三年生と話ができました。合格したいという熱意、素直な目、そして純真で優しさに満ちた心に触れ、私自身が励まされ、心が洗われた時間でもありました。本当にありがとうございます。平成三十一年、三月一日、私が校長として始めて卒業証書を手渡す生徒、それが皆さんです。私にとっても生涯忘れ得ぬ日です。

さて、昨年八月九日、「命の講話」の中で次のような話をしました。「私たちの命はどこから来たのでしょうか。突き詰めれば、約四十六億年前に地球が誕生し、約三十八億年前に海の中の生命の誕生に行き着きます。地球上に生命が誕生した確率は『十の四万乗分の一』と言われていきます。例えて言うと、腕時計を分解して、バラバラになった部品を二十五メートルのプールに投げ込み、水の自然の流れによってまた元通りの腕時計になるぐらいの確率と言われています。また、私が今ここにいるのも命のリレーがあつたからです。皆さんの命は決して親からのみ授かったものではありません。親の親、すなわちおじいさんやおばあさん、そしてその親、またその親……そのご先祖様の誰か一人が欠けても皆さんは今ここにいないということです。そう考えると、自分が自分として今こうして生きていることの奇跡を感じずにはいられないのです。」

人は皆、何らかの使命を持ってこの世に生を受けたと、私は信じています。私が私であることには意味があるのです。人と比較して優劣や勝敗を決めるのではなく、自分の志す道をしっかり歩んでいくことが「私を生きる」ということです。『一燈照隅・万燈照国（いっとうしようぐう・ばんとうしようこく）』。これは平安時代に天台宗を開いた最澄のことばです。まず私たち一人一人が一つの灯りとなって周囲を明るく照らさなければならぬ（一隅（いちぐう）を照らす）ということ、そして一部分しか照らすことができない一つの灯火も百、千、万と集まれば国中を照らすことができるという意味です。体育館の天井から吊つてあるライトを想像してください。しっかりと光を放つライトが多数集まって、体育館一面を明るく照らしています。一個のライトが自分、体育館を社会や世の中と考えてください。一人一人がそれぞれの立場や場所で精一杯努力し、ベストを尽くすことが結果的に社会全体を明るくするのです。皆さんの中には、自分が輝く場所（分野）をすでに決めて、進学や就職をする人がいます。まずはしっかりと学んで専門的な知識や技術・技能を身につけてください。そして将来、強く輝く光となって社会を明るく照らしてください。

明治維新の立役者、西郷隆盛は「敬天愛人」ということばを残しています。天を敬い、人を愛すること、すなわち、自分の利益や他人からの評価ではなく、使命や天命に従って行動し、天が人を平等に愛するように広い人間愛や慈愛を持って他人と接することが必要である、ということです。自分のためだけに生きて、偉大な事を成し遂げた人物は歴史上一人もいません。世のため、人のために「私」という奇跡を精一杯生きること、自分の運命は開かれ、変わっていくのだと思えます。

結びに、永六輔さんの「生きているということは」という詩を贈ります。

生きていくということは 誰かに借りをつくること
生きていくということは その借りを返していくこと
誰かに借りたら 誰かに返そう
誰かにそうしてもらったように 誰かにそうしてあげよう
生きていくということは 誰かと手をつなぐこと
つないだ手の温もりを 忘れないでいること
めぐり逢い愛しい あい やがて別れの日
その時に悔やまないように 今日を明日を生きよう
人は一人では生きてゆけない
誰も一人では歩いてゆけない

さらば、七十一回生。そしてまた会おう。お元気で。